



## モダンメディア編集委員を終了するにあたって

国際医療福祉大学医学部  
感染症学講座 主任教授  
まつもと てつや  
松本 哲哉  
Tetsuya MATSUMOTO

早いもので、モダンメディアの編集委員を務めて10年が経過しようとしている。私は編集委員第5代の熊坂一成先生、岩本愛吉先生、河島尚志先生などの後任として、第6代目の編集委員に指名された。就任の依頼を受けた時、私は51歳で、東京医科大学の主任教授ではあったものの、まだ編集委員になるには経験不足が否めなかった。しかし、当時、第5代の先生方の推薦を受けて、チャレンジするつもりでお引き受けしたのであった。

本誌は、感染症や微生物検査を主なテーマとした雑誌として非常に長い歴史があり、多くの読者がおられて、この領域においては確固たる存在であった。特に印象深いのは、私が以前、東邦大学医学部の微生物・感染症学講座で勤務していた頃、名誉教授であった桑原章吾先生が、お部屋の書棚にモダンメディアの過去の書籍を大切に並べて保管しておられることであった。私にとって偉大すぎる存在の桑原先生の強い思い入れが感じられた。また、第4代の

編集委員は私の師である山口恵三先生が務めておられ、本誌の歴史や編集委員の責務を熱く語っておられたことが印象深かった。そのため、私がおのち、編集委員に選ばれたときはとても名誉なことでもあり、誇らしさを感じた。

就任当初は高名な編集委員の先生方に囲まれて緊張を感じていた。ただし、読者にとって興味深い企画とは何なのか、と考えていろいろと提案すると、他の先生方の承認も得られシリーズ化されて、興味深い原稿が掲載されていった。自分の意見が雑誌の内容に反映されていくことを実感しながら、楽しんで企画を考えられるようになっていった。

しかし、新型コロナウイルスによるパンデミックは編集委員会のあり方を大きく変えてしまった。御徒町近くの栄研化学本社で開催される月1回の編集会議は、リモートでの参加も可能となり、私は成田の病院から通うのが困難になったため、大半の会議をリモートで参加せざるを得なくなった。



新春放談「ネクストパンデミックを見据えて…」(70巻1号)にて、ご参加していただいた先生方とモダンメディア編集室の皆さんと

新型コロナウイルスに対する世の中の関心も高まったため、本誌もこのテーマを取り上げることになった。ただし、新しい感染症が出現したことで、まだわからないことの方が多く、執筆者の選定も難しかったが、依頼した先生方の多くは快く承諾して素晴らしい原稿を執筆していただいた。

編集委員の10年間は振り返ってみると、私にとっ

て貴重な経験であった。栄研化学の編集担当の方々には良い雑誌を作るための熱意が感じられ、読者の方々からもいろいろなご意見をいただいた。座談会では普段は会えない先生方と意見交換の機会を与えていただいた。さまざまな思い出を与えていただいたモダンメディアに心から感謝している。